

【特集：戦略研究から見たウクライナ戦争】

戦略研究とは何か

航空幕僚監部運用支援・情報部
1等空佐 水岩 伸吾

（本稿は筆者が航空研究センター防衛戦略研究室長在籍時に執筆したものである。）

はじめに

2022年2月24日、ロシアはウクライナに侵攻した。これは周知のとおり各種専門家の大方の予想を裏切る侵攻であった。以降、ウクライナに関する各種評論は百家争鳴、様々な視点から議論が交わされているなか、本稿はこの事態を分析する視覚としての戦略研究の特徴の一端を明らかにすることを試みる。

戦略研究のような抽象的かつ比較的普遍的な概念の場合は、その使い手毎に特徴ある概念構成がなされることが一般的であり、その意味で本稿は筆者の所属する航空自衛隊幹部学校航空研究センターにおいて、現職の航空自衛官が実務経験の色濃い立場から様々な意見交換を重ねるなか、徐々に輪郭を表しつつある「エア・アンド・スペース・パワー」の側面から、戦略研究の特徴について論じようとするものである。

例えば「戦略研究から見たウクライナ戦争」を論じるにあたっては、戦略レベル、作戦レベル及び戦術レベルの各レベルにおける活きた教訓を網羅しようとする意識がまず重要になる。戦闘意思、戦争維持、戦争遂行、さらには軍事のみならず、政治、社会、経済等、様々な側面からの分析を重層的かつ多角的に重ねることで、事態をより現実的かつ立体的、ひいては構造的に把握することが初めて可能となるという前提が本稿にはある。その場合に、各種先行研究において一般的に意識されるような階層論的な分類のなかでの「戦略」に関する理論ベースの概念構成に拘泥せず、あくまでも現実の安全保障において何が必要であるか、という観点から航空研究センターは戦略研究を追求してきた。

そして今、筆者はその航空研究センター防衛戦略研究室長の立場にある（2021年8月

より現在に至る）。本稿では伝統的な戦略研究に関わる思考枠組に依拠しつつ、そこに筆者自身の特技経験や勤務経験を踏まえ、戦略研究の全体像とまではいかずとも、エッセンスを追求する考察を試みる。形式的かつ実証的な、定型的な議論に止めず、不確かであろうともイメージや発想に関する議論も積極的に扱うものとする。

このような構想の下、本稿はまず「戦略研究」を主業務としている航空研究センター防衛戦略研究室の創設経緯と、筆者自身の現職に至る勤務経験に触れる。次いで、戦略研究の哲人達の主張を概観し、その主だったもののなかから、筆者がイメージする戦略研究との親和性を見出し得るものに関する考察を試みる。これらを総括し、「戦略研究とは何か」という問いに対する答えを見出し、結びとする。

冒頭、ウクライナ戦争に関する専門家の予見に触れたが、そもそも研究とは何かを予期したり予言したりするものではない。従来理論や法則とは異なる動きを見せる事象に対し、その軌道修正のため、先行研究に対する批判や補論を試みる作業が研究である。したがって、わからない課題（謎）があるからこそこれらを解明しようとする動機や意欲が「研究」という行動を奮い立たせるのだと考える。プロイセン・ドイツの軍人であり戦略思想家として有名なクラウゼヴィッツが定義する「戦略」の言葉を借りれば、戦略研究とは「戦争の目的に則して、個々の戦闘を束ね統制する研究」である。

戦略の淵源をさらに遡るならば、「戦略（Strategy）」の語源となる「Strategos」が「戦闘に従事する将軍たち²」を意味していたことを見落とすべきではない。この意を踏まえれば、戦略研究とは「各種能力を有する将軍たちの視点をもって戦闘に勝利するための研究」と言い換えることもできるであろう。

これらを踏まえた一つの考え方として、戦略研究とは世の中のわからない課題（謎）という「闇」を照らすための解明意欲を源泉とする「光」と言い表すことも可能である。「灯台下暗し」という故事が表すように、単体の「光」だけでは物理的に照らすことができない「闇」が存在する。そのような「闇」を様々な角度・次元から各種光源の「光」で照らすこと（すなわち多角的かつ重層的な視野の重要性）によって、世の中のわからない課題（謎）を解明する姿こそが戦略研究を体現するイメージとなる。

1 防衛戦略研究室創設経緯等

防衛戦略研究室は、奇しくもロシアがクリミア（ウクライナ）を併合した2014年、我が国唯一のエア・パワー（当時は、スペースの用語は付されていない。）に関する研究機関として、航空自衛隊（以下「空自」という。）の知的基盤を強化し、空自の精強化及び任務遂行に資することを使命とし発足した航空研究センター内に新設された4つ

ある室の1つである。以来、当然ながら「戦略研究とは何か」という問いをその時々
の室長はじめ研究員は常に研究活動の念頭に置き、エア・パワーを意識の中心に置きなが
ら各種研究を進めてきている。具体的には①我が国及び諸外国の防衛力の整備、運用そ
の他安全保障環境に係る事項の調査研究に関する事、②戦略に関する理論の調査研究
に関する事、③防衛協力・交流への貢献、省内外研究機関との共同研究等の実施に関
することに焦点を当てるものとして想定され、研究活動を継続している³。

今日までに創設より8年以上の歳月が経過し、現在の安全保障環境は、国家間の相互
依存関係が一層拡大・深化し、特定の国の伸長などによるパワーバランスの変化が加速
化・複雑化し、既存の秩序をめぐる不確実性が増している⁴。さらに、急速な技術革新
に伴う軍事技術の進展を背景に、現在の戦闘様相は、陸・海・空のみならず、宇宙・サ
イバー・電磁波といった領域を組み合わせたものとなり、加えて、一国のみでの対応が
困難な安全保障上の課題が増加している⁵。

防衛戦略研究室が担う研究対象はこのように複雑化の度合いを高めている一方、基本
的な研究焦点は揺らぐことなく、センター創設以来空自の精強化に貢献すべく研究を追
求してきている。筆者も初代より数えて5人目の防衛戦略研究室長として、室内研究者
個々の強みや特徴における多様性を伸ばし、「研究の光」を切らさないことを信条とし
て勤務している。この意識の基底に遡り戦略研究の本質を探るべく、以下では筆者が
2021年8月に防衛戦略研究室長を拝命するに至るまでの特技経験や勤務経験の概要を整
理しておきたい。なぜなら、戦略研究は本来的に実戦経験から生まれ、様々な時代や状
況、さらにはその論者の個性を大いに加味しながら論じられてきた。戦略研究に関する
考えを提示する上で、その論者がどのような背景や立場の者であるのかを明らかにして
おかなければ議論の客観性を担保することは難しいと考える故である。

巷では「トップガン マーヴェリック」が大ヒットを記録しており、空自のパイロッ
トを目指す若者も増えているという。36年前（筆者小学生時）、前作となる「トップ
ガン」の影響を受け、自身も戦闘機操縦者を目指し今に至る。約20年前に空自の操縦
士資格を獲得し、以降10年間ほど戦闘機部隊で勤務した。その後、外務省、航空幕僚
監部、統合幕僚監部で勤務したのち、将来の空自を担う組織後継者教育や戦闘機部隊等
で活躍を期待される特技後継者教育にも携わらせて頂き、更に2年間（と言っても世界
中に蔓延したコロナのため行動には多大なる制限があったが）、米国防総省の連絡官と
して勤務し現職に至る。

筆者が航空部隊における戦闘機や練習機の運用経験から得たことは、端的に言えば「生
の価値観」と「3次元空間の常態化」である。つまり、「任務遂行のため、如何に他者を

生かし、如何に自身が生き残るか」を「常時3次元空間に身を置き」日々無心に毎日を過ごすことにより、「結果に対する執念」と「各種事象を俯瞰しようとする意識」が自ら身についたと自覚している。これは「操縦者」という特殊な職業が、日々「評価される（する）」環境にあり⁶、それゆえ、日々半強制的に自分を省みる機会を得る環境が客観的に物事を眺望する意識の強化に結実したと認識している。また、外務省、幕僚監部及び米国勤務での経験は、特に国外出張や海外勤務等を通じ、日本を外から見ると同時に各種事象を俯瞰しようとする意識を、自身に強く抱かせる期間であった。自身の経験を振り返れば振り返るほど、研究とは程遠い者が防衛戦略研究の長として勤務していることに対し、空自の懐の深さを感じる次第であるが、例えば米国社会には如何なる分野においても「専門家だけに委ねない」文化があり、各種「委員会（Board）」に専門家以外の「レイ（Lay⁷）」の参画があるように、「戦略研究」というある種専門知で閉鎖されがちな分野においては、むしろ積極的な意味で門外漢の存在が専門知を事実や直感から遠ざけない機能を果たし得る。無論、門外漢に専門家の研ぎ澄まされた知見を恣意的に支配せよ、というような乱暴なことを言っているのではない。物事を見るとき、とりわけ変化の兆しのようなわずかな違和感のような段階にある変化に敏感である必要のある安全保障分野のような世界においては、先入観や固定観念はむしろもう一人の敵というほどの緊張感で向き合わねば取り返しのつかないことになる。重要なことは、個々の光源から放たれる光を束ねて暗闇を照らすことであり、見えているもの、さらに言えばこうあってほしいというような願望に引きずられた都合の良い物の見方に対し、常に掣肘を加えるような存在が戦略研究には必要である⁸。この点については様々な考え方があり得ようが、そのような役割は、実のところ運用者としての経験に根差した感覚を持ち合わせる実務者にこそ期待すべきものではないかと筆者は考えている。

次項では、恐れながらも戦略研究の哲人達の主張を手掛かりに、筆者自身の経験を発露とする戦略研究のイメージや、防衛戦略研究室がこれまでに追求してきた戦略研究の方向性の共通項や差異について考察し、概念の相対化を試みる。

2 戦略の哲人

当代随一の戦略家として名高いイギリスのコリン・グレイ（Colin Gray, 1943-2020）は、彼の戦略理論のエッセンスが凝縮された著書『現代の戦略（Modern Strategy）』において戦略を検討するに際し、戦略と戦略検討の有益な構成要素との関係を、レースとレーシング・カーの構成部品の関係に例えている。レーシング・カーはエンジンやギアなどの様々な部品で構成されており、その1つ1つが如何に優れていても、いずれか一

つが劣っていればレースに勝利することはできず、また、すべての構成部品が優れていても、性能の良し悪しは他のレーサーとの競争で決定づけられるという⁹。つまり戦略と戦略検討の有益な構成要素との関係に表すならば、「1つの分野で特段に優れていても必ずしも戦争に勝利できるわけではなく、戦略にはすべての構成要素を考慮した包括的なアプローチが必要」ということである。結果に対する諸要因の関係が論理積の世界観（結果が諸要素の積、すなわちいずれかの要素がゼロの場合に結果自体がゼロとなる関係）であるとも言えよう。このことはベトナム戦争において、米国は技術、戦術、作戦、戦域レベルのほぼあらゆる面で優位に立っていたにも関わらず、最終的にはベトナムからの撤退を余儀なくされた史実が示す通り、「様々なレベルの戦略で優位であっても結果的に大戦略レベルで勝利できるわけではない¹⁰」と戦略研究専門家のエドワード・ルトワック（Edward Luttwak）が著書『戦略論（Strategy）』で述べていることと類似する。またグレイの言う「包括的なアプローチ」は、同じく戦略研究専門家であるマーティン・クレフェルト（Martin Crevelde）も著書『戦争術（The Art of War）』において「戦略研究には大別して二つのアプローチがあり、一つは戦略理論の個別検証、もう一つが戦略形成に影響を与える諸要素に着目する方法¹¹」であると述べていることとエッセンスを同じくしていると言える。

また、グレイは20世紀を代表する戦略家として、米空軍人のジョン・ボイド（John Boyd, 1927-1997）を高く評価している。グレイは「ボイドの『OODA¹²ループ』は、戦略の理論の中心に時間的な次元の重要性を添えている¹³」と言う。グレイのボイドに対する評価は、「OODAループ」の概念が空中戦の戦術だけではなく、戦争における作戦、戦略、そして政治のあらゆる次元に適用できるのかという議論があるが、ここではあくまでも「OODAループ」の「状況判断と作戦のテンポを速め、我の時間を圧縮し敵の時間を延伸する¹⁴」という発想だけに着目している。

「OODAループ」の発想の原点は、朝鮮戦争において、米空軍戦闘機（F-86）よりも能力に勝るソ連（当時）戦闘機（MiG-15）との空中戦にある。ボイドは同戦闘機において「強力な敵に勝つために、敵に勝る連続状況判断により常に主動権を確保し、敵の予想しない行動により敵を恐怖と心理的混乱に陥らせることによる勝利する戦術」を開発したという¹⁵。またボイドは、戦闘機を駆動させるエネルギーに着目し、コンピュータを用いて数式化することによって「エネルギー機動性理論（Energy-Maneuverability Theory）¹⁶」を完成させた¹⁷。この理論は、戦闘機の機動はエネルギー保存の法則に基づいていることから、空領域での戦闘（空戦）において戦闘機の機動能力はそもそもその運動に変換することができる機体のエネルギー量によって決まるという。つまり運動エネルギー

一と位置エネルギーをより多く有し、さらにこれらのエネルギーを迅速に消化し、かつ充填できる機体こそが最強の戦闘機であると言い、この理論に基づき F-15 や F-16 という傑作機が誕生している¹⁸。これら航空機は実戦配備されてから 40 年以上経つが、そのレーダーや通信、電子戦の技術の追加的更新に支えられつつ、その高度なアビオニクスについてはいまだに前線で最強レベルを誇っていることから、その理論的支柱が物事の本質を鋭く捉える感性豊かな着眼と発想に根差していることは言を俟たない。

いずれの理論もボイドの組織の慣習に対抗した創造的な思考と独創性によるものであるが、それら思考は戦闘機操縦者として空中戦に身を置き、その中で自ら（優勢な敵であっても）敵を撃破する「勝利への執着心」と、3次元空間感覚を発露とし、2次元空間感覚だけでは気づくことができなかつた「諸要素への着目」とが融合し、結果としてボイドの理論はグレイやクレフェルトが言う「アプローチ」を体現したものと考えることができる。

もともと、こうしたことは筆者の経験がボイドと共通していることを言わんとするものではなく、2次元の世界が常態である者にとっては異常な世界である3次元に身を置くことによってしか気づくことができない要素が存在することを強調したに過ぎない。さらに言えば、戦略研究が求める独創力や破壊的な発想力は大胆なほどに多様な組織においてこそ生み出されるものであることの一端を表すに過ぎない。

以上を踏まえつつ、次項ではロシアによるウクライナ侵攻に垣間見る要素を踏まえ、戦略研究に必要な思考について考察する。

3 垂直思考から水平思考さらに次元思考へ

ここまでで戦略研究において様々な要素を考慮した多角的なアプローチが重要であることを見てきた。研究のアプローチ、つまり思考方式には垂直思考 (Vertical Thinking) と水平思考 (Lateral Thinking) があるとされる。一般的に垂直思考は物事を論理的に深く追及する考えのことであり、一方、水平思考は既成理論や概念に捉われない多角的な考えである¹⁹。いずれも戦略研究にとっては必要な「思考」であるところ、前項で述べたボイドの実例は、物理的な意味での3次元の思考を起点としつつも質的に次元を分けた発想へと転じた例として、即ち次元思考 (Dimensional Thinking) として捉えることが可能である。

ウクライナで生起している事象は様々あるが、例えば「無人機」がここまで活躍した戦闘あるいはその有用性を見出した戦いは過去においてなく、まさに2次元は勿論、3次元のマクロからミクロの視点に到るアプローチによって、偵察から目標選定、追跡さ

らには攻撃においてこれまでの伝統的な戦いに変革を与えたものであり、同時に思考の角度や幅も劇的に変化させるものと言える。

また次元思考は時間要素も包含する。つまり4次元の思考であるが、既に意思決定の迅速化（Agile）に関連する事象やドローンによって採証されたリアルタイムな状況をSNS等を通じてタイムリーに発信される様は、戦闘当事者のみならず国際社会の世論をも形成しているウクライナの状況に鑑みれば、垂直とも水平とも言えない、まさに次元思考と言えよう。さらに過去の戦訓や実績といったデータを基に予測（Forecast）するだけのアプローチではなく、未来起点の発想（Back cast）による思考の有用性を考慮しつつ、また現在だけ見ても未来は見えないこと、しかし未来は全てまだ明らかになっていない現在を包含したものであることから、これらを踏まえれば次元思考の広がりには4.5次元まで拡張していると言えよう。

軍事技術の進展に伴い益々複雑化する研究対象に対して、垂直や水平思考は勿論、次元思考の研究の「光」を持って「闇」を照らす必要性がますます高まっている。

4 研究者との対話（空自に貢献できる研究とは）

空自の研究開発は「防衛方策研究」、「兵器体系研究」及び「人間科学研究」に区分される。航空研究センターは、空自の研究機関として組織の知的基盤を強化しつつ、空自の精強化及び任務遂行に資することを使命としていることは前述した。航空研究センターでは、これら区分を網羅的に実施する体制になっており、センター研究者は日夜、空自が直面する課題（謎）を、「研究」というツールを用いて解明すべく努力している。その中で、筆者が現配置に着任して以来よく耳にするのが「空自に貢献できる研究」という、いわば「要件」である。逆説的に考えてみると「空自に貢献できない研究」を実施している研究者がいるのだろうかという疑念は払拭できない。各種の事情から結果として発簡できていない研究論文や研究メモがあるのは事実としても、少なくとも研究者を管理する立場として、仮に「空自に貢献できない研究」があるのならば筆者は処分ものである。これまでの経験を通じて見出だした一応の結論を述べるならば、「空自に貢献できる研究」を実施せよというような「要件」には実のところ実体的な要件性は見出せず、そのような「要件」が光源の多様性を奪うようなことがあってはならないという着意こそ重要であろう。無論、単なる知的好奇心に根差した研究は組織として推奨されるものではないが、むしろ重要なことは、各種の研究成果を実務に応用する側の懐の深さであり、そこに様々な着想を届けることこそ戦略研究が実務に寄与するものとなるかどうかの要諦である。

研究という取り組みを光源としてイメージした場合、その光源はLEDのように直線のかつ遠くまで力強く照らすものもあれば、マントルランタンのように広く柔らかく照らすものもある。つまり「空自に貢献できる研究」とは空自の課題（謎）という闇を照らす光であり、「貢献」を掌る執行機関が状況に応じて使い分けられる「光源」という名の「研究成果（選択肢）」を創出することではないだろうか。

このような「イメージ」が、次項で結言として綴る戦略研究のイメージ、即ち筆者が現配置を拝命して以来、洋の東西を問わず様々な研究者と対話を通じて認知することができた「戦略研究とは何か」という問いに対する一定の応えである。

5 結言（戦略研究のイメージ）

本稿では「戦略研究とは何か」について、筆者の特技経験や勤務経験を発露とする感性的な部分を言語化すべく、戦略の哲人による議論も参照しながらその輪郭とエッセンスの可能な限りのイメージ化に努めてきた。要件を明示した定義には至らないものの、戦略研究のイメージを世の中のわからない課題（謎）という「闇」を照らす「光」として捉えることで、光そのものに実体があるわけではなく、光の反射が事物を立体的に描き出すのであり、それは光の当て方、波長、それらの複合など、様々な組み合わせによって可視化される部分が増えるイメージである。何らかの定型的な規格に沿った状況把握としてではなく、むしろ戦場や戦局を含めて安全保障環境の不確実性を「闇」として規定することで、光がなければ状況把握は不可能である、という全体像を意識することが重要である。したがって学際的であることはもちろん、様々な研究アプローチと、そのそれぞれに固有の強み、さらにはその複合こそが重要であり、それらを総体的かつ体系的に整えていくためには、飽くなき探求心こそ重要であり、それは生存を最大限の力で追求しようとする安全保障本来の姿勢とも合流するものであることを論じてきた。

加えて、航空研究センターに固有の拘りとしても戦略研究をどう捉えるべきかについて整理した。国家の自衛権を担保する必要最小限の実力組織である自衛隊の一機関が実施する戦略研究については、自衛隊という組織が固有に直面する防衛の課題を踏まえて理解しなければならない。自衛隊はわが国の自衛権を担保する必要最小限の実力組織である。したがってその組織力に余裕はなく、いたずらに知的好奇心に課題設定を委ねるわけにはいかない、という研究者にとっての厳しいジレンマに直面することになる。端的に言えば、自衛隊による研究は、防衛力、すなわち対処能力と抑止能力を高めることに裨益することを常に追求すべきことを肝に銘じなければならない。

世の中のわからない課題（謎）という「闇」を照らす「光」の源は研究に従事する研

究者一人一人であり、光源の「強さ」は組織の「精強性」そのものであろう。研究者という「光源」はその光を照射するためには熱量（エネルギー）が必要であり、ボイドが「エネルギー機動性理論」において提示したイメージになぞらえるならば、戦闘機の機動能力の根源たるエネルギー量と同等の「研究者の熱量（エネルギー）」は、空自の課題（謎）に対する研究者それぞれの「探求心」と「矜持（プライド）」との積算であり、その解は「研究成果（選択肢）」として創出されるものである。これら研究成果は空自への貢献のみならず、防衛省自衛隊、さらにはわが国の自衛権を担保する実力組織全体に裨益するものと確信している。

筆者の業務は、防衛戦略研究室長として自室の「研究者の熱量（エネルギー）」を絶やすことなく、研究という多種多様な「光源」の「研究の光」を灯し続けることであり、もって「勝利するための研究」を創発していくことであると認識している。

（2022年12月19日受付）

1 Carl Von Clausewitz, *On War*, Princeton University Press, 1976, p.128.

2 ギリシャ語「στρατηγός」の英語表記「strategos」を筆者が意識したもの。

3 岸本康男『エア・パワー研究（創刊号）』航空自衛隊幹部学校、2014年、49頁。その他航空研究センターには、各種研究の企画調整を実施するとともに各研究室の研究業務を統括する「研究企画管理室」、部隊運用、教育訓練及び防衛力整備の基盤となる考え方を示す『ドクトリン』の開発及び部隊等への普及実施する「運用理論研究室」、航空自衛隊の事態対処の実効性向上に資する研究を実施する「事態対処研究室」がある。

4 防衛省『令和4年版防衛白書』（2022年12月18日）1頁。

5 同上。

6 特に戦闘機操縦者という職業に限ったものでは無いが、その能力が発揮されるとされる環境等を想定した場合、「罷免」される可能性が高い職業という趣旨で表現した。

7 Layの形容詞の意味である「not of a particular profession」すなわち「専門家以外の人」の意。

8 この論点はより一般的には「自分がしたことの無い仕事の管理者は務まるか否か」という命題に関わる。例えばプロ野球の監督は、必ずしも選手として大成している必要はない、とされることの是非に関わるであろうし、あるいは交響楽団の指揮者は全ての楽器の名演奏者である必要はない、とされることにも関わる。とりわけ研究という分野においては、特にそれが戦略研究のように実務に直結するものとして緊張感高く想定されるような場合において、こうした一般的な命題は更に複雑な意味を持ちうるであろうし、そこには様々な考え方があるものと想定しつつも、あえてここでは私見を披露させて頂いた。

9 Colin S. Gray, *Modern Strategy*, Oxford: Oxford University Press, 1999, p.25.

10 Edward N. Luttwak, *Strategy: The Logic of War and Peace*, Revised and Enlarged ed.(Cambridge, MA: Harvard University Press, 2002).

11 Martin van Creveld, *The Art of War: War and Military Thought*, (London: Cassell,2000).

12 OODA: Observation-Orientation-Decision-Action

13 Gray, *Modern Strategy*, pp.90-91.

14 *Ibid*, p.91.

15 石津朋之・山下愛仁『エア・パワー 空と宇宙の戦略原論』日本経済新聞出版社、2019年、319頁。

¹⁶ エネルギー起動理論（E-M理論）は、ボイドが1962年に提唱した航空機（戦闘機）の機動性に関する理論であり、じ後の戦闘機的设计、評価を客観的かつ数量的に判断できるようにした。これは戦闘機的设计において革命的な発見であった。

¹⁷ 順番的にはE-M理論が先で、OODAループはボイドが空軍を退役したのち、「人間の思考パターンの研究」において理論として完成させた。ボイドの各理論、さらには理論評価については既に様々な研究者が解説しており、特に石津朋之・山下愛仁『エア・パワー 空と宇宙の戦略原論』が詳しい。

¹⁸ E-M理論は後の世界中の戦闘機的设计に大きな影響を与え、ボイドはF-15戦闘機的设计に参加し、これを傑作機とした（ボイドに言わせればF-15は傑作機ではなく、F-15の教訓を活かして設計・制作したF-16の方が傑作機とのこと）。

¹⁹ James S Hernandez and Prathibha Verkey, “Vertical versus lateral thinking,” *Physician Executive*, Vol.34, No.3, 2008, pp.26-28.